

## 東魏北齊の「樹下思惟」像に見られる宝冠と着衣形式について

王姝

本発表は東魏北齊の都であった鄴城（河北省臨漳県）における樹下思惟像の作例を取り上げ、その形式に東アジアの半跏思惟像への影響が見られることを指摘する。「樹下思惟」像とは双樹の下で榻座に坐す半跏思惟形の像を指し、東魏北齊にも多く見られる。仏伝の「愛馬別離」を表した作例も同類像と見てよい。鄴城遺址からの新出土資料を含め、鄴城様式の造像はこれまでに相当の件数が発見された。その中に「樹下思惟」像も多数出土しており、単体像だけでなく光背の背面に表された例も多いことから、東魏北齊の中心地において相当程度流行したことが推定される。この流行はこの時代に限られることから、特有の宗教的・歴史的原因があると考えられ、東魏北齊の首都における仏教信仰の様相を解明する有用な資料になると言える。

東魏北齊における石仏像は一見同様の特徴をもつが、鄴城様式の仏像と山東省の青州様式の仏像には大きな違いがある。特に樹下思惟像については、青州で発見されたのはほぼ北齊の作例であるが、鄴城では東魏の作例も少なからず存在する。そして青州には見られない特徴として、鄴城の東魏の樹下思惟像には三日月冠がしばしば表現され、北齊になると交脚像にも現れるようになる。また、こうした三日月冠の表現形式は朝鮮半島や日本の半跏思惟像と相似する。加えて、鄴城の樹下思惟像がまとう裙の衣文表現は東魏から北齊まで変化が少ないのに対し、青州の半跏思惟像では明らかに異なる様式と鄴城様式が共存している。

さらに、以上の表現形式以外に、鄴城で発見された北齊～隋時代の菩薩像の宝冠形式は、慶尚南道で発見された百済または新羅の半跏思惟像や野中寺半跏思惟像、朝鮮半島の広域で発見された三国時代の菩薩立像などに通じる特徴をもつ。しかしこうした特徴は青州の関連作例には見られないことに注意を喚起したい。これらの作例の検討を通じ、本発表では東アジアの半跏思惟像の起源について従来の青州説に疑問を唱え、鄴城の造像が東アジアの半跏思惟像に大きな影響を与えた可能性を指摘したい。